

# 文化高知

2006年5月 NO.131



「Messages to the sky」 矢島 路絵

〈もくじ〉

オーストラリア帰り、高知在住 .....	村田耕一	2
プロフェッショナルであること .....	井関佐和子	3
翔け若き芸術家たち		
第1回美術作品コンクールを終えて .....	下山郁夫	4~5
第16回高知出版学術賞を審査して .....	中内光昭	6~7
端午の節句と薬の話 .....	小松 一	8~9
読むこと・書くこと .....	山川禎彦	10~11
山本憲関係資料について .....	氏原和彦	12
1~3月の事業のご報告 .....		13
風俗歳時記・風伯 .....		14~15

(財)高知市文化振興事業団



# オーストラリア帰り、高知在住

村田 耕一

世界地図を開いてみると四国のほぼ真下にオーストラリア大陸がある。何となく形も似ている。もちろん、大きさは段違いで四国はオーストラリアの四分の一以下である。

僕はそのオーストラリアになんと十四年間も勤務していたのである。少々変な日本人になっても不思議はなかったけれど、何とか普通の日本人のまま帰国できた(と本人は思っている)。その後、高知に来て、早三年がすぎた。本日に月日の経つのは早いものだ。同じ頃、高知に赴任された方で、もう転勤された方も何人かいる。ザラリーマンは気楽な稼業”と言われた時期もあるが、一方、悲しい稼業でもある。勤務地や部署など、大方は自分の意思通りにはいかないものなのである。僕も今年の異動はどうにか切り抜けられたが来年は? と気をもむ今日この頃である。オーストラリアの時は言葉

と仕事のやり方の関係でなかなか交代する適任者がいないこともあり、最後までいることができた(僕の他に二名いた)が、ここではそうもいかないだろう。

先行きに限りを感じられるようになると、急に高知の存在がなんだかすごく大事なものに思えてきた。本当に良い所だ。人は大らかにして寛大で、酒と魚に野菜が美味しい。街そのものも何となくゆったりとしている。もちろんこれは良い方向だけから見ていると言えるかもしれないが、少々悪い部分は帳消しにできるくらい高知は良い。しかし、経済状況を始め、数値で見ると高知は惨憺たるものだ。

今、日本中、都市と地方の格差が大きな問題になっている。町づくり三法”も決まったようだが、これですべてが解決するとは到底思えない。もっと深刻な状況が到来するのをもそ

う遠くなくかもしれない。道州制の件にしても高知にとって良いのか悪いのか判断の分かれるところであるが、今の高知のままで良い結果が勝手に向こうからやってくると考えるのはあまりにも楽観的すぎるだろう。

今、高知に不可欠なことは、自立と自律であろう。今までのように国に文句を言ったり頼んだりすれば何とかなるということはもう無いだろう。しかしながら、高知には素晴らしいものがたくさんある。自然、農産物、海産物、独自の技術を持った企業、そしてなにより”人”。今、全般的には、現況を何とかしよう、頑張つて良くしようという雰囲気にはなつてきているのは確かだが、いざ、具体的にどう進めるのかということになると明確でない。よく言われる、総論賛成、各論反対(各論色々)の実態が垣間見られる。ここを突破

した。

今までヨーロッパでプロとして踊ってきたのですが、日本に帰って来て、更にプロとしての自覚や難しさを学びました。ダンスを職としている限り、楽しいだけで毎日過ぎていきません。しかし、厳しい毎日の中にも、日々の努力によって自分の身体

が変化していくのを感じることで、舞台に上がる心構えも当時の自分とはほとんど変わっていきまじった。自分の存在を見つけないに一杯だった二十代前半とは違い、今はやっと自分のダンスを見つけれられるようになり、決して妥協することなく、前に進むと言う気持ちを持ち続けることをNoisnで、金森様さんの下で踊っていて、心から思えるようになりました。

今年の二月、初めてのワークショッpを高知で開くことになりました。Noisnのメンバーとして高知に来てワークショップをしたのですが、新潟でも私はそれほど教えているほうではないので、本当に良い経験になりました。人にダンスを教えると言うことは、今現在の自分と見つけ合うことになり、見失っていることや足りないことが明らかになってきます。四日間を通して参加してくれたダンサーの

できれば、本当の改善、進化が達成できるのではないだろうか。それにはビジョンを明確にし、関係者の理解を得られる具体案を提示して議論し、個々の支持を取り付けることが必要であろう。総論から一気に各論にいくのではなく、段階的な同意を得ながら最終の形へ持っていくことがその道かもしれない。そのためには、一つにまとまらなければならぬという意識を持つことが大事ではないか。それぞれの人が対立、牽制しあうのではなく、一緒になって考え、進んでいくことが第一である。そこからしか将来は見えてこないのではないだろうか。

今こそチャンスである、一方、この時期を逃すと本当に大変なことになる可能性すらあるのではないだろうか。そのために僕に何ができるのかは、はっきりとは分からないが、とりあえずは中心商店街の将来に關しての問題について商店街の皆さんや市、県の行政サイドの方々とともに何らかの方向性を見いだすことに貢献できないものかと考えている。

自分でも、この一年、どうなっていくのか楽しみにしている。  
むらたこういち/株式会社高知大丸  
代表取締役社長

ダンスが変わっていくのを目の当たりにして、うれしく思うと同時に、自分がプロとして生半可な気持ちでやっていたわけにはいけないと言いうことも感じました。

今の日本の現状では誰でもダンサーと言える時代であり、プロもアマも差があまり感じられません。そんな状況に戸惑いを感じていますが、私たちがやっていることが認められ、プロフェッショナルダンサーの価値を知っていただける日が来ることを待ち望んでいます。

いせきさわこ/舞踊家 Noisn 06  
所属

## プロフェッショナルダンサー

井関 佐和子

私が高知でバレエを始めたのが三歳の時。そして高知を離れたのが十六歳の時。そのたった十三年間という短い年月の間に、私はダンスを愛するということを学びました。そして、私のダンス人生の大きな転機となる日をまるで知っていたかのように、自分はバレリーナーになると信じ切っていた毎日でした。

十六歳の時、自然といろいろなことの歯車が噛み合い、私は何の迷いもなくヨーロッパに渡りました。この時から七年間、私はダンスに対する考え方や、この世界の厳しさ等を知り始めました。

十七歳の時、それまでいたバレエ学校を自分でやめて、ベジヤールの学校に一人で行き、今までクラシックバレエしかしたことのない私にとつて悪夢のようなオーディションを受けました。それを通してということによって、バレエ以外のダンスということ

そしてその後、ネザールランドダンスシアター2に入団して、私はこの世界で自分という存在を見つけ始めることになりました。この世界というのが、今、日本で呼ばれているコンテナポリリーダンスです。

その後、私はスウェーデンに渡り、自分が踊ってみたいと心から思っていた振付家マツエックの下で踊ることになりました。しかし、このころから私は日本を恋しく思い、日本で踊りたいという気持ちが大きくなってきました。もちろんそのころ日本にはまだ今のNoisn(ノイズム。金森様率いる日本初のヨーロッパスタイルのプロダンスカンパニー)のようなカンパニーもなく、そのようなものが早く日本にできないかといつも心待ちにしていました。

そして、ついに二年前このような素晴らしい環境で、ダンスだけに集中できるカンパニーが日本にできました。それは私が二十五歳の時で





# 翔け若き芸術家たち

— 第一回 美術作品コンクールを終えて —

下山 郁夫

今、芸術の分野は、大きな変革の時を迎えている。一九三〇年〜一九五〇年代に、相次いで誕生した美術

団体、「独立美術協会（昭和五年）・自由美術協会（昭和十二年）・新制作派協会、後の新制作協会（昭和十一年）」等は、当時最も斬新な公募団体であった。作家達は光を放ち躍動していたのである。ところがここ数年、中央、地方を問わず、若者達の公募展ばなれは著しく、隆盛を極めていた各団体では、減少対策に躍起となっている。パソコン等の普及もあって、作品に対する多様化が進み、純粋な絵画からの脱却が生じてきている。もはや公募団体に、その流れを引き戻す力はなく、作家達のエネルギーは、直接社会に係わった形で発表され、その現象は海外にまで波及している。

えて作品コンクールの意義を問おうという企画である。若手作家達の火付け役的な展覧会の一つに「GEISAI」がある。学園祭的な雰囲気は彼らの心を掴んだ。その内容は、広い会場を小さなブースに区画し、参加者はそのブースをお金で買い取る形式がとられ、だれでも自由にパフォーマンスを楽しむことができる、というものだ。審査員は、川瀬敏郎・榎木野衣・寺田克也・フルカワミキといった、現代アーティストの中堅的役割を担う人達で構成され、その全体を村上隆が統括している。一見すると既存の公募展と何ら変わらないようにおもえるのだが、公開審査に近いもので、何よりも、表現の自由による総合審査がうけたのである。息苦しい閉塞的な所は何もない。入場者数約九〇〇〇名であった。

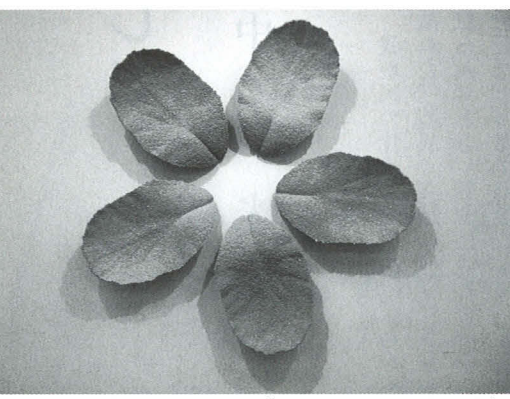


さて、今回の美術コンクールについてであるが、展示スペースの広さに合わせて、上限を、二六〇cm×二六〇cm以内とした。これは県展等、概ね一〇〇号程度に、企画が抑えられている点を考慮した。また年齢だが、十八歳以上、三十五歳までとした点も出品者には好評であった。五十歳前後でも芸術家の世界では若いのであるが、この年齢になると、自分自身を生かす術を蓄えているものだ。三十五歳までとしたのは、何も臆することなく、創造した世界をぶつけてほしかったからに外ならない。出品展数三十六点、大作が並んだ。

かるぼーと第一展示室は堂々たる景色となり、審査をお願いした鍵岡正謹氏（高知県立美術館顧問）も満足そうであった。前述にて若手作家の公募展ばなれを記しているが、その一方で、現代若者気質とでもいうのか、戦いを求めず、傷付くのが怖く、表面的な付き合いの中に自分を置く、バーチャルな生き方を好む。いや、そのようにしか生きられない現代社会の仕組みの中で、最も自分をさらけ出すことのできる芸術分野が、彼らの心をとき放ってくれるのではないかという思いもあった。

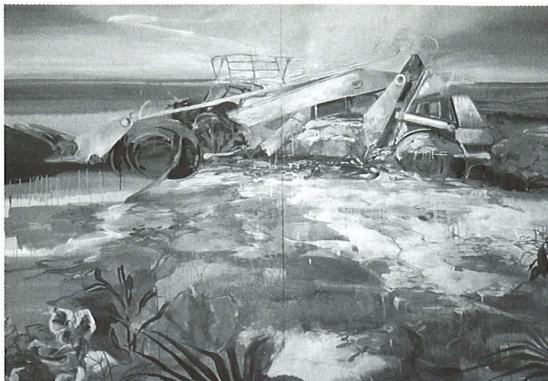
おそらく、「GEISAI」が支持されたのは、このような事柄を熟知した上でのお祭りだったからだと思う。公募展はいわば戦いの場、自問自答する舞台でもある。喜怒哀楽あつての人生である。公募展の是非はともかく、一方で、様々なジレンマの中で、かつての作家達は翻弄されてきた。しかしもう一方では、荒波を乗り越えてもきた。この美術作品コンクールには、心と心のぶつかり合いの中から、何か、自分自身を鍛えてくれる、後押ししてくれる、そのような気持ちが育まれればとの思い

が込められている。すべてが画一化、企画化された現代の、心の殺風景さを埋めるものは、心の耀きしかあるまい。最後に残るものは人である。感情を平面に移行し、ぶつけた思いを鑑賞者が返す、そんな中からエネルギーを吸収する、これこそコンクールの醍醐味なのだ。したがって、公募展の内容は、過去のものとはまったく異なっているのだが、先輩達が創り、闘ってきた精神を憶い、明日に繋がるチャレンジする心を、大切にしてほしいものである。最優秀賞は、上田奈保さんの「Bran」に決まった。鍵岡氏は「彼女の作品は、一歩先の世界を提示してくれる」と、審査評を載せている。優秀賞は、島村悠さんの「意志」と上村卓大さんの「おかあさんのちょうこく」が射止めた。「いづれも力作で全国の若者の中でもトップクラスに入ると思う」と鍵岡氏は言う。顧みて、今思うと、見出しにある「翔け」とは、コンクールへの発表を通して、「生きる力」を感じとってもらいたいということだったように思う。

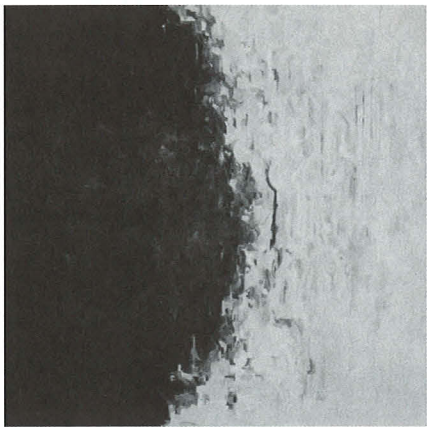


「おかあさんのちょうこく」

しもやまいくお／高知市文化プラザ  
活性化事業推進委員・TOSA・美術アカデミー主宰



「in plant」



「意志」



# 第十六回

## 高知出版学術賞を審査して

中内 光昭

「高知」と「学術」に力点を置いて、郷土関連の学術を振興する目的で創られた本賞も十六回目を迎え、賞の名前も関係者にはかなり浸透してきたと思われる。出版界に目をやると、一部の話題本が爆発的に売れる一方で、堅実な本は、なかなか算盤に合わない。現在では、学術書の発行は、「研究」し、「執筆」するだけでは駄目で、「発行」という壁を乗り越えた者だけに許される。

その三点の受賞作を決定した。順序は受け付け順である。

宗林由樹・一色健司 編

『海と湖の化学 微量元素で探る』

京都大学学術出版会(五六〇ページ)

本書「まえがき」によると、本書の主題は「海と湖の微量元素に関する生物地球化学ならびに分析化学」で、「内容の多くは、京都大学理学部およびその学派の研究者たちが、七十年にわたって積み上げてきた成果に基づいている」。内容は、海(湖)水中に存在する微量元素の測定法、存在様式、分布、動態、地球化学的考察などで、寄稿者は二十四名。二名の編集者(一人が一色高知女子大学教授)によってまとめられている。

我が国の化学研究の主流からやや離れた、特異な領域の研究に焦点が絞られており、類似出版物の少ない分野を、多数の著者により、かなり広くカバーしている。概説書、入門書、技術マニュアルとして貴重な出版物と認められた。しっかりした学派的編集物らしく、関連文献、索引等も充実し、入門者にとって便利な書物である。一方、多数の執筆者が担当分野について記述した「総説集」的な性格が見られ、寄木細工的な感じが拭えないが、総体として、堅実、かつ有用な学術書として高い評価を受けた。

大野 晃 著

『山村環境社会学序説』

農山漁村文化協会(二九八ページ)

残念なのは、索引がないことで、学術書、特に「序説」と銘打つ入門書としては、大きい欠陥である。

その意味で、本年応募作品十三点は、多いとは言えないが、まずまずの点数である。本年は自然科学関係の書物も比較的多く、分野のバランスも取れ、着実な業績が多かった。第一次の審査を通った八点について、八人の審査員が分担、精読し、意見を交換した後に、投票を行い、その結果をもとにして、全員一致で、次

高知の女性の生活史作成実行委員会編  
『高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない』

「」ち男女共同参画社会」くり財団  
(三六七ページ)

本書は三部よりなっているが、そのベースは、第一部の「聞き書き」

である。我が国の女性の活動史で本県は重要な位置を占めている。しかし、「名も無い」女性たちの生活史は記録しない限り、永遠に「歴史」の外に消えてしまう。「庶民の、それも女性の生活史をいま残したい」(巻頭言)という目的で、県下の八十歳以上のお年寄り、九十名の、ひとりひとりの歩んだ道を、百名に及ぶボランティアが収録し、多様な体験を、「生活を支えた」、「自立へのころざし」、「結婚」、「戦禍をくぐる」、「子どもの頃」、に大別、編集、記録してある。

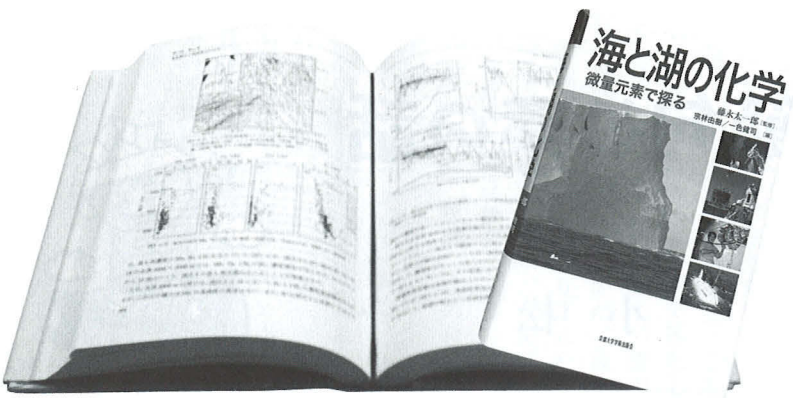
第二部では 県下の女性の特筆すべき活動史が、「限られたスペース

にエキスを詰め」収録されている。第三部は、時代概要「土佐は婦人運動発祥の地」、年表「高知県の明治時代以降の女性史」で構成されている。

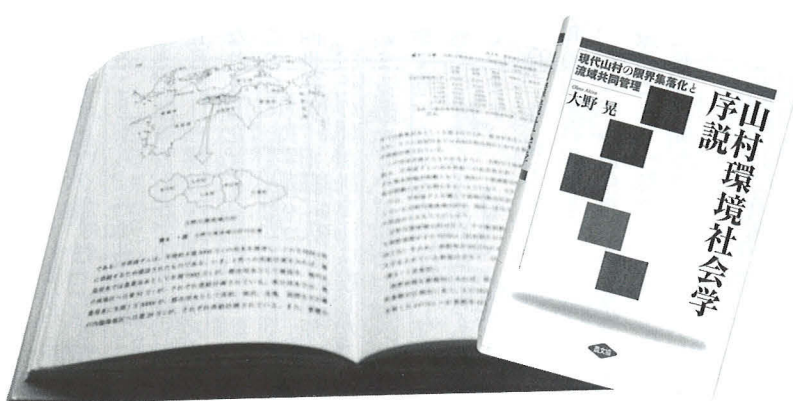
明治、大正、昭和という激動の時代を生き抜いた女性個人々の生活史の記録は、どの地にあっても貴重であるが、それが、女性運動において特異な地位を占める土佐の女性となれば、なおさら貴重である。九十名の女性からの直接の「聞き書き」は二ページに圧縮されているが、活字の背後にある「時空」を感じさせる迫力を持っている。多彩なコラム、図、写真、用語等への註、索引、さらに、第二部、第三部の総括的な考察等、将来の研究者への細かい配慮が認められ、「学術書」として評価された。

なお、これら三点と共に、川上憲人・甲田茂樹編「今日の疫学」が最後まで候補に残り、医学・医療行政関係者にとって、極めて有益な教科書、教養書であるとの評価を受けた。

なかうちみつあき／高知大学  
(元学長)



「海と湖の化学 微量元素で探る」



「山村環境社会学序説」



「高知の女性の生活史 ひとくちに話せる人生じゃあない」





# 端午の節句と薬の話

小松 一

五月五日はこどもの日、また端午(端五)の節句ともいいます。端は物の始まりという意味で、午は五に通じることから、月始めの五のつく日をさしますが、中でも数字の重なる五月五日を端午の節句と呼ぶようになりなりました。

この日に粽や柏餅を食べる習慣は四世紀頃、汨羅に入水した屈原を弔い、その姉が餅を江に投じたことに始まるようです。粽は、古く茅の葉で巻いたことから茅卷、また多く巻くことから千巻が語源ともいわれています。

茅は、生薬名を茅根といい、イネ科の白茅の根茎を乾燥させたもので、利尿、止血作用があります。民間療法として、豚肉か赤小豆とともに煎じると黄疸や浮腫に効果があります。

端午の節句は、菖蒲の節句ともいい、邪気を払い疫病を除くことから、菖蒲湯に入る風習があります。我が国では九五七年、和気時雨が村上天皇に健康維持の為に五月五日の菖蒲湯を勧めたのが最初で、室町時代に民間に広まりました。菖蒲の茎を適当な長さに切り、束にして熱めのお湯につけます。よもぎの葉と一緒に入れると香りがよく、効果も一層増します。

中国明代の『本草綱目』という書物には「端午の節句に菖蒲を切り、酒に漬けて飲むと、一切の悪を除く」と書かれています。

菖蒲は、サトイモ科のセキショウウのことで、生薬名は石菖蒲といい、根を乾燥させたものです。胃液分泌促進作用により消化不良に効果があるほか、精神安定作用・利尿作用があります。また、発熱・意識もうろう状態・呼吸の乱れ・顔のほてり・目の充血・頭がふらつく・難聴などの症状を伴う熱性疾患や咽喉炎・声帯浮腫などによる声がれにも使用します。

菖蒲は尚武に通じることから、江戸時代より男児のある家では鯉のぼりを立て、甲冑・刀・武者人形等を飾ってその子の将来を祝しました。鯉のぼりは、鯉の滝のぼりから立身出世の象徴として庭先に立てるものです。

私たち漢方薬や鍼灸を業としている者には、鯉のぼりと一緒に立てる吹き流しの方がなじみ深いものです。吹き流しは、五色(青・赤・黄・白・黒)に塗られ、鯉を魔物から守る役目をしていますが、この五色は漢方の理論である陰陽五行説に基づいています。

祝いの事に、球体から垂らした糸を引き、二つに割れた中から紙吹

雪が降ってくるものを「くすだま(薬玉)」といいます。これは元来、邪気を払い不浄を避けるため、麝香・沈香・丁香などの香料を錦の袋に入れ、円形にして糸や造花で飾り、菖蒲や蓬をあしらった、五色の糸を長く垂らして柱や簾にかけるものでした。『続日本後紀』に「五月五日に薬玉を佩て酒を飲む人は、命長く福ありとなも聞こし食す」とあり、『枕草子』にも「節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。…中宮などには、縫殿より、御薬玉とて、色々を組み下げてまゐらせられたれば、御帳立てたる母屋の柱に左右に付けたり」とあります。『太平記』には「五月には、三日六衛府、菖蒲并花を献る。四日は走馬の結番、并毛色を奏す。五日端午の祭、薬玉御節供・競馬・日吉祭・最勝講を被行」との記載があります。このように、日本古来の伝統行事は、その多くが漢方と深く結びついているのです。

菖蒲と共に薬玉に使われたヨモギは、生薬名を艾葉といい、別名「五月葉」といいます。苧婦膠艾湯という漢方薬に配合され、止血作用があるため不正出血・月経過多に用います。調経・安胎作用もあり、婦人科領域の疾患に常用できます。その

弱に用いると強壮作用があります。さて、入学や入社で新しい環境の中に置かれて一ヶ月、続いていた精神の緊張がゴールデンウィークで急にゆるみ、復帰する自信を失って生じる病気が五月病です。このような時は森林浴をするとうれいでしょう。五月晴れの日には、精神を安定させ

る作用のあるフィトンチッドが大量に放出され、気分転換に最適です。皆さんも古典に倣って外に出て薬煎をし、鬱々とした気分を吹き飛ばして、新鮮な気持ちで勉学・仕事に勤しんでみませんか。(こまつはじめ/薬学博士・薬剤師・鍼灸師・いちまる漢方薬局店主)

他、湿疹・白癬症などの皮膚病には、温かい煎液で洗浄すると効果があります。また、胃液分泌を促進し、食欲を増進します。ただし大量ではかえって悪心・嘔吐を起すことがあります。注意が必要で、艾葉の絨毛はよく乾燥させた後、夾雑物を取り除いてお灸のもぐさとして用います。

五月五日は薬との関わりが特に深いので、「葉の日」ともいわれます。六一一年五月五日、推古天皇が菟田野(現在の奈良県宇陀市)で「薬獵」を初めて行い、鹿茸を採取したと『日本書紀』にあります。鹿の若角を取っていたようですが、後に薬草を採集するようになりなりました。これに因み、昭和六二年、全国医薬品小売商業組合連合会が「葉の日」を制定しました。なお、この日正午に雨が降ることを「葉降る」といい、その雨を神水として薬の作成に用い、雨のかかった薬草は特効があるといわれています。

## 本草備要 卷四 禽獸部 鹿茸



出西地似羊而大角有節最堅勁能碎金剛石與膜骨能食鏃夜宿防患以角掛樹而棲角有掛者真一邊有節如疎乃山麋山羊非野鹿也 鹿茸(大補鹿茸) 甘温一云純陽生精補髓養血助陽治筋健骨治腰腎虛冷百一方鹿角屑散黃為末酒服四股痲痛頭眩眼黑崩帶遺精一切虛損傷勞惟脈沉細相火衰者宜之鹿角初生長二三寸分岐如鞍紅如瑪瑙破之如朽木者良

鹿茸 鹿角初生長二三寸分岐如鞍紅如瑪瑙破之如朽木者良。鹿茸を採取したと『日本書紀』にあります。鹿の若角を取っていたようですが、後に薬草を採集するようになりなりました。これに因み、昭和六二年、全国医薬品小売商業組合連合会が「葉の日」を制定しました。なお、この日正午に雨が降ることを「葉降る」といい、その雨を神水として薬の作成に用い、雨のかかった薬草は特効があるといわれています。

淨桑火煮七日入醋少許取角搗成霜用其汁加無灰酒熬成膏用畏大黃鹿相取之補虛也。鹿茸は、ニホンジカ及びマンシュウジカの雄の頭上の、細かい毛の生えた幼角を加工したものです。骨質の角を鹿角といい、作用は劣りますが比較的安価です。漢方では動物性生薬は、生殖・生長など基本的な生理機能を強力に補うときの主薬と



# 読むこと・書くこと

## 「車の両輪」

山川 禎彦

わたしは、文学学校や各種の文化教室で文学作品の解説や文章指導を

ながくやってきていますが、「おこがましく」ということばがびつたりです。わたしの非力さは当然として、受講生の真摯な迫力にたじろいでしまいます。むしろ、わたしが一介の生徒となつて、受講生達から教えられることが多いのです。それでも気をとりなおして、一時間一時間を冷汗かいて頑張っている今日です。

新しく受講される方々からよくきかれることは、入門の上にかぶさっている「文学・文章」についてです。この教室では作品の文章を読むことか、文章を書くことか、そのいずれに重きを置いての講義であるかの質

問です。受講する方はそれなりの心準備がいくことでしよう。

というのも作品を鑑賞することは比較的受動的な姿勢をとれますが、文を書くとなるとかなり能動的な作業が必要とされます。読むのは好きだが書くのはイヤツという人が案外多いのです。読むことと書くことは車の両輪だと説明しながらも、わたし自身あやふやなのです。その迷いの結果、わたしは「視写」という方法をとりました。

たとえば大原富枝の「婉という女」という作品を選んだとします。父親の野中兼山の波乱にとんだ生涯、その結果一族が宿毛に配流れたこと、お婉さんと谷奉山との顛末を学んだ

後で、この作品の読書鑑賞に移ると大変興味をもち喜んでいただけです。

この名作の感動を何とか、書く作業につなぐことはできないかと考えるわけです。読書感想文を書くというのも一方法ではありますが、わたしは視写という方法をとりました。このことばは余りききなれないかもしれませんが、原文を一字一句そのまま原稿用紙のマス目に写し取っていくことです。ちょうど、般若心経を写経するようなものです。この作業なら容易にできます。

作品の一字一句の意味を汲み上げながら写し取ることは、初心者にとってもかなり有効な手段です。句読点のうち方、改行のコツ、字句の適正

な選び方、構成の工夫、といった文章の基本事項がわかるような気がしてきます。多種の作品の視写は、かなり文章力のある方でも、自分でも気づかない「我流」の悪癖を削り取り、真の「個性」を発揮するのに役立ちます。

この方法はたしかに効果があります。文章入門の受講生達が、自分の生きざま、体験を綴ってみようと決意したものの筆が戸惑いなかなか前に進みません。こういうとき、視写に戻ると不思議に先が見えてくるものです。そういった例をたくさんみてきました。

「文章」とは何か、これは大変難しい命題です。しかし、確かにいえ

ることは多くの優れた文章家（作家）

の出発点は自己を語る文章から始まっています。本県の作家でも、上林暁、大原富枝、宮尾登美子、田宮虎彦、安岡章太郎も初期には「わたし」を語る感動的な文章を書きました。

決してむつかしい文章ではありません。平易で読者の頭に素直に入ってくる文章です。といっても、だれにでも書ける文章ではありません。こういう達意の文章が書ける方々に共通していることは、実にたくさん作品を読まれていることです。他の人の作品の滋味を十分に汲みとり、自家葉籠中の物にしていないことです。読み飛ばしではとても不可能です。そこで初心者には一字一句を写し取

る視写をすすめるゆえんです。

はじめから上手な文章を書くよう、人に感動を与える文章を書くことと力んでいたのでは、とても先には進みません。理屈をこねたもつともらしい「文章の書き方」等の指導書よりは、視写の方がはるかに効果があります。と、いったはなしをしますと、きまつて受講生の何人かが、「先生のおはなしをきくと、視写は個人で十分できることだから、わざわざ文章教室に行く必要はありませんね」と、確認にこられ、わたしはおもわず困惑します。いわれてみればその通りで、否とはいえませんが、わが生計を削るおもいです。

そこで、多少はもったいぶった高尚なはなしをしなければなりません。車の両輪が出てきます。読むと書くとの格闘です。

だれしもそれぞれ有意義な人生を歩んでこられたことでしょう。とりわけ高齢者にとっては、おもいは入でしよう。鳥倉千代子ではないけれど人生さまざまです。

楽しかったこと、悲しかったこと、苦しかったこと、それぞれ他人には計り知れない貴重な生きざまが胸の中に彫りこまれていることでしょう。そして、ペンというノミを使って心の中をほり返し文章の形にして再生することは決して無駄なことではありませぬ。文章にすることによって

書いた方は自己を省み、また読まれた方は明日に生きる勇気を鼓舞されるかもしれません。昨今はパソコン、メールなどで便利になりましたが、一字一句を素手で織りなすことも忘れてはいけなとおもいます。

さて、もとに戻りますと、人の生き方にも読むと書くの二派があるようにおもいます。肝心のわたしはと問われると、車の両輪にはおよばず、片輪ではないかと、忸怩たるおもいです。

（やまかわさだひこ／高知文学学校  
運営委員）



平成十八年二月、高知県高岡郡佐川町出身で、漢学者としても著名な自由民権運動家・山本憲（一八五二～一九二八）関係資料の高知市立自由民権記念館への一括寄託が正式に

## 山本 憲関係の資料について

氏原和彦

親族の方とともにその地を訪れました。雪まじりの寒風が吹きすさむ中、播州赤穂線に乗り、日本三大奇祭の一つ「はだか祭り」で有名な西大寺を過ぎると、竹久夢二の生家が残る邑久に着きました。邑久駅からタクシーを十分ほど走らせると、山本憲の旧宅とお墓の残る大浦の美しい海岸線が見えてきます。昭和四年九月六日に建立された山本憲の自然石のお墓は、牛窓の海と、エーゲ海をイメージしたりゾートホテル・リマーニを眼下に臨む風光明媚な小高い丘の上に、悠然と建っていました。

親族の方ともにお墓を清め、資料寄託の報告を行った後、近くの旧宅を訪ねました。いかにも漢学者が



好みそうなたたずまいを残す平屋の旧宅は、風刺画家ビゴアの水彩画に残る中江兆民の仏学塾と、どこか似かよった風情が感じられます。六歳で山本憲の養女となった山本信氏が、初めてこの家に着いた時、机の上には「秀玉百人一首小倉葉」という美しい絵入本が置かれていたといえます。山本憲は、養女の成長を願い、この本を一生懸命探されたそうであり、その人柄がしのべられます。信氏にとっても思い出深いこの旧宅は、死後門下生の松村訓氏、日本画家の妹背平三氏等が住んでいましたが、現在は所有者が変わり、借家人が居住しています。

さて、翌十四日、いよいよ山本憲関係資料の搬送作業を行う日に向かってきました。資料一点一点を丁寧に梱包する作業が続く中、養女の信氏は、名残を惜しむかのようにその作業風景をじっと見つめておられました。梱包作業は予想以上に手間取り、最終的に作業が終了したのは午後七時頃でした。この千点以上に及ぶ膨大な資料群の中には、自由民権運動関係の貴重資料が、数多く含まれています。例えば最も早い時期に結成された女性民権結社「岡山女子懇親会規約」の貴重な原資料のほか、「克明社新聞発行規約」、「集会条例違反

之罰金納証」、「大阪音楽規則草案」、明治二十二年以降の板垣退助や中江兆民からの書簡等の初出資料が多数残されています。その他書幅、筆、硯、陶器類、変わったところでは龍骨（マンモスの骨）、瓦など個人的コレクションといえるものも残っています。さらに驚かされたことに、山本憲はこれらの所蔵資料の目録を自分で作成し、資料の内容だけではなく、その資料に関する情報を数冊の本にまとめたことです。この自筆目録の存在は、資料整理を行う上でも大変重要な意味を持つものであり、整理の羅針盤的役割を果たしてくれるでしょう。

実は、以前「山本憲関係資料」のうち漢籍を中心とする数百点の資料群が、岡山県立図書館に寄贈されましたが、昭和二十年六月岡山大空襲により運悪く全焼してしまった経過があります。それだけに残された資料に対する親族の方の思いは強く、当館が果たすべき責任は重大です。この貴重な山本憲資料を「死蔵」させることなく整理を進め、目録化・情報公開作業を実現するため、今後とも記念館職員一同力を合わせてがんばっていききたいと思っています。

うじはらかずひこ／高知市立自由民権記念館学芸係長

## 高知市文化プラザかるぽーと 1～3月の事業の振り返り報告

### ◆かるぽーとアートウェイブ計画 「アート九反田くったんだ」

一月から二月にかけて、「歴史」と「食」をテーマにしたワークショップ「アート九反田くったんだ」を開催しました。「歴史」編では、高知市九反田周辺の歴史講座と町歩きワークショップ、「食」編では地元食材でピザを作るといった楽しい内容でした。

### ◆美術中級講座「彫塑スキルアップ カリキュラム」

一月二十四日～二月二十四日、美術中級講座「彫塑スキルアップカリキュラム」を実施しました。この講座は、美術分野においてレベルアップを図る、今までになかった中級者向けの講座です。

今回は彫塑講座を開設、講師に西本忠男先生を迎え、参加者十名が熱心に制作に取り組み、楽しみながら技を磨きました。

### ◆南河内万歳一座 仮面軍団

二月十二日、大阪を代表する劇団、

南河内万歳一座による演劇公演「仮面軍団」を開催しました。かるぽーとでは二回目の公演となる今回の演目は、花粉症に悩む青年を通して、頼りない青春の時間と実感の無い可能性を時にはシリアス、時にはユーモラスに表現し、演劇の持つ可能性を感じさせる舞台となりました。

### ◆Noismダンスワークショップ 2006

二月二十二～二十五日、コンテンポラリーダンスカンパニー「Noism」によるワークショップを開催しました。講師に高知出身で現在「Noism」に所属する井関和子さんを迎え、身体表現を学びました。最終日、成果発表と井関和子さんによる「Noism」の作品解説を行いました。

### ◆高知市文化体験プログラム

「やってみよう人形劇、こんにち はデนมマーク」、オペラ人形劇「太っちょ子馬」

三月四日、五日の両日、人形劇ワー

クショップを開催しました。午前中は人形劇団クルルテ代表の松本則子さんを講師に人形の制作とコミュニケーションゲーム、午後からはデนมマークのアンダーグラウンド音楽劇団によるオペラ人形劇「太っちょ子馬」を上演しました。

### ◆アーティストバンクプログラム vol.3 「ライブ パレット」

三月九日、アーティストバンクプログラム第三弾「ライブ パレット」を小ホールで開催しました。今回の出演者は、プアナニアロハ・マカヒヌ・ヨシコ中村とフラの仲間たち、林達也、濱田洋一・あかりの皆さんで、フラダンス、ファンクダンス、フラメンコの熱いライブ公演をお楽しみいただけました。

### ◆第22回写真コンテスト「高知を撮る」入選作品展

写真コンテスト「高知を撮る」の入選作品展を、三月十四日～十九日、市民ギャラリーで開催しました。懐かしい高知の風景や出来事、人々の暮らしを記録した写真や、撮影者の好きな高知を表現した写真など、七十点を展示。会場では、熱心に作品に見入る鑑賞者の姿が多く見られました。

### ◆ブラスの祭典「ザ・ブラスファクトリー」

三月二十六日、「ザ・ブラスファクトリー」演奏会を開催しました。この演奏会は、金管楽器と打楽器の日本屈指のトッププレイヤー二十二人が一堂に会する夢のスーパーブラス「ザ・ブラスファクトリー」の旗揚げ公演で、全国でも例のないものです。

第一部が各楽器のアンサンブル団体による演奏、第二部が出演者全員による「ザ・ブラスファクトリー」としての演奏で、吹奏楽ファンならずとも、まさに夢のひと時、最高の演奏に浸っていただけたいと思います。

### ◆まんが・漫画・マンガ展！2006

三月四日～三十一日、横山隆一記念まんが館企画展示室で「まんが・漫画・マンガ展！2006」高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会合同原画展を開催しました。四回目的の開催となる今回は、自己紹介作品、各テーマ作品や高知まんが道場掲載作品など、個性あふれるまんが原画等約二百二十点を展示しました。





# 高知 遺産

## 高知城の景

功名が辻の放映でにわかにも注目を浴びる高知城。まさにまちのシンボルとして高知の街に聳える天守閣は、こぶりだけど端正なスタイルで見飽きない。ただ街からお城を眺めると、つまらないビルの谷間に埋もれるかのように、あまりにも小さくすぼまって見える。城下町の風情なんて、このまちにはもうほとんど残されていないのだ。(竹村直也)

# 風俗

## 安楽死

分の身において考えると、日本尊厳死協会の尊厳死の定義にあるように「不治の終末期患者が、(中略)いたすらかな延命措置を拒否し、安らかに人間らしい死をとげること」とあるように、私も、自分で判断できなくなつたとき、その時をもつて不必要な延命治療をして欲しくない。

先日、血液検査での異常で、私は精密検査を受けることになった。最悪の場合も考えた。そんな折、七人の安楽死が報道されていた。他人事ではなかった。私なら毎日の痛みを耐えながら生きていたくはない。たとえ自発的安楽死の場合でもこれまでさまざまな論議がされているようだが、自

本人の意思が確認できないまま、家族の希望で延命治療を続けるのはわかるが、身体中に管を通され、身体は褥瘡で見る影も無く、尊厳ある人間的な状態とは言い難いむごい結果をもたらしかねない。場合によっては、患者の年金欲しさに延命治療を続けるケースもあったと聞く。(現在は治療費もバカにならないが)  
日本での安楽死はたとえ患者自ら望む安楽死であっても、犯罪として取り扱われる。日本人は死にたくてもなかなか死ぬことができない。安楽死が禁止されれば、安楽死が合法化される以前のオランダの例を出すまでもなく、不正に行われる安楽死はむしろ潜在化する、と思うべきだろう。  
だから、安楽死を単に事件としてのみ扱うのではなく、マスコミも安楽死をもっと積極的に議論してほしい。自分にとって安楽死は、最後のおそらく唯一の希望のトモシビだと思えるから。(冬雲雀改め春曉)

## 第149回 市民映画会

### ひと 「理想の女」

南イタリアの避暑地アマルフィで出会った美しい女たち  
スカーレット・ヨハンソンとヘレン・ハントが織り成す珠玉のドラマ



### つづ 「綴り字のシーズン」

家族は、ミステリー。あなたは、愛する人たちの本当の気持ちを知っていますか？

リチャード・ギアとジュリエット・ピノシェが贈る感動のニュー・ファミリー・ドラマ



と き：6月22日(木)、23日(金)  
と ころ：高知市文化プラザかるぼーと大ホール  
上映時間：理想の女 12:35/16:15/19:50  
綴り字のシーズン 14:20/18:00  
料 金：一般前売り1,300円(当日1,500円)  
学生/シニア1,000円  
(身体障害者手帳などをお持ちの方は学生料金)  
※前売券は、かるぼーとほか市内各プレイガイドおよびサニーマート各店で販売。  
※お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業企画事業課 (088-883-5071)

## 今号の表紙

「Messages to the sky」 矢島路絵

建築空間へのファイバーアートを制作して13年になる。何年も同じ場所に展示されるアートワークは埃や照明、耐久性などに考慮すると繊維は棒に巻いたり加工したりと極力フラットに仕上げ、バランスを取るためいろいろ素材を組み合わせることが多い。無機質な建築資材の中で、ファイバーの触感はなくてはならない要素だと私は思っている。

(やじまみか/ファイバーアーティスト)



## 高知を撮る

第22回写真コンテスト入賞作品

薫風の中で (平成17年 大方町)

竹山 弘祐

5月の風を受けてなびくTシャツ。その中を機敏に動き回る少女の瞳は澄みきっていた。

## もったいない 風俗歳時記



第二次世界大戦で、日米が戦ったことすら知らない大学生がいる昨今、戦前派の高齢者が、毎日、耳にして育った「もったいない」という言葉は、もはや死語に近い。

ところが、〇四年、女性として初めてノーベル平和賞を受賞した、ワンガリ・マタイ・ケニア環境副大臣の手によって、この言葉が、世界共通語として復活したのは、なんとも皮肉な話である。

マタイさんは、〇五年二月に来日したとき、この言葉に出合い、「これこそ、世界へのメッセージとして大事な言葉だ」と、直感したという。(フナネット・リンク編「もったいない」マガジンハウス)

多年、環境問題に取り組んできた、マタイさんらの合言葉「三つのR」(リデュース・リユース・リサイクル)を、たった一言で言い表しているから

である。

「三つのR」は、資源の無駄遣いをなくし、使えるものは再利用し、廃物は加工利用するの意である。

しかし、ここで強調しておきたいのは、マタイさんの読み方の深さである。「もったいない」の表側は、物的損失を惜しむ気持ちです。いっぱい、その裏側では、失ったものを手にしたり、完成させたり、そこにたどり着いたりするまでの「形には表れない大切なもの」に馳せる感謝の気持ちと、それを無にしてしまった嘆きとが一体となつて、日本人独特の精神世界を形づくっています。(上掲書)

マタイさんらの運動に賛同する日本の財界人が、(モッタイナイ・ブランド)の製品を販売し、その収益を世界の飢えている国々に寄付する予定と聞く。(朴)



# 高知のまんがあれこれ展

まんが甲子園入賞作品・日曜市軒先まんがギャラリー…

**入場無料**

- \*期間 開催中 ▶ 2006年6月23日(金)
  - \*場所 横山隆一記念まんが館 企画展示室
  - \*時間 9:00~19:00 (最終日は17:00まで)
- 月曜休館



今年で15回を迎える「まんが甲子園」の歴代入賞作品をはじめ、日曜市のにぎわいに一役買っている「日曜市軒先まんがギャラリー」作品や、(株)けんかまの「かまぼこ板マンガ大賞」歴代大賞作品、「まんがの日記念・4コマまんが大賞」入賞作品等も展示。「まんが王国・土佐」のまんが文化を体感して下さい。

◀第14回まんが甲子園 最優秀賞  
富山県立高岡工業高等学校  
テーマ:本物

## 2006ゴールデンウィーク

### まんが館イベント

開催日:5月3日(水)~7日(日)

#### 似顔絵コーナー

高知漫画集団・高知漫画グループくじらの会のメンバーがあなたの似顔絵をお描きします

\*10:00~16:00(途中休憩あり)

\*参加費:500円

#### まんがカレンダー

自分だけのオリジナルカレンダーづくりに挑戦してみませんか

\*参加費:無料(常設展観覧者のみ)

主催\*高知県、「あったか高知」まんがフェスティバル実行委員会、(財)高知市文化振興事業団・横山隆一記念まんが館  
お問い合わせ\*〒780-8529 高知市九反田2-1 高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館  
\*TEL:088-883-5029 \*FAX:088-883-5049 \*URL:<http://www.bunkaplaza.or.jp/mangan/>



2006年

午前の部 11:00開演 午後の部 15:00開演

**入場料【全席自由】** [5/1より販売予定]

6/18(日)

午前の部 高知フライター・ウインド・アンサンブル

3歳未満 無料

子ども券(3歳以上小学生以下) 500円

一般券(中学生以上) 800円

親子券(子ども券+一般券) 1,200円

午後の部 鏡野吹奏楽団

## 高知市文化プラザかるぽーと大ホール

主催: (財)高知市文化振興事業団

後援: 高知市教育委員会/高知新聞社/RKC高知放送/  
NHK高知放送局/KUTVテレビ高知/KSSさんさんテレビ

※お問い合わせ: (財)高知市文化振興事業団 088-883-5071 <http://www.bunkaplaza.or.jp/>

■前売り券販売所

高知市文化プラザミュージアムショップ…088-883-5052

高知新プレイガイド ……088-925-4335

高知大丸プレイガイド ……088-825-2191

高知県民文化ホール ……088-824-5321

高知県立美術館ミュージアムショップ ……088-866-8118  
サニーマート各店